



故・金子哲雄さんの妻

金子稚子さん 46

亡き人と

△「流通ジャーナリスト」として、新聞やテレビに活躍した金子哲雄さん。弾丸のようにしゃべるスタイルで、一気に人気を博した▽

テレビ用の演技、と思われることもあるかもしれませんが、本当にあのまま。実際はもっと辛辣なことを言っていました。ものすごく優しいのですが、毒舌。私が雑誌のライターなどをしていた時に出会い、彼のその二面性が魅力で、一緒にになりました。社会に、お買得な情報を正しく伝えたい、というのが彼の思いでした。強い立場の人が、情報が行き渡っていない人に対して正しいことをする、それが許せない人。それをどう伝えたら社会に分かってもらえるか、夫婦で一緒に考えていました。

△金子さんが40歳の時に「肺カルチノイド」が見つかり、いつ死んでもおかしくない、と宣告される▽

結婚10年目でした。せきが

「逝き方」伝えたい



①「今は、悲しくて泣き暮らしていた頃と違って、夫が近くに来てくれていること、夫のサポートを感じて、ありがたく泣ける日々です」という金子稚子さん(左)とサッカーの試合を一緒に観戦したときの金子夫妻(2002年、千葉県で。金子さん提供)

かねこ・わかこ 1967年、静岡県生まれ。2012年10月2日に41歳で亡くなった金子哲雄さんの妻。ライフ・ターミナル・ネットワーク代表。近著に「金子哲雄の妻の生き方」(小学館)。

「書き残すことが誰かを勇気付ける」

「流通ジャーナリスト」として、新聞やテレビに活躍した金子哲雄さん。弾丸のようにしゃべるスタイルで、一気に人気を博した▽

何も覚えていません。これほどエネルギーにあふれた人が死ぬはずがない、と思う反面で、その約3年前に父親ががんで亡くなっていったので、どう進行していくかは分かる。死んでしまうのかも想像しませんでした。

「今は、悲しくて泣き暮らしていた頃と違って、夫が近くに来てくれていること、夫のサポートを感じて、ありがたく泣ける日々です」という金子稚子さん(左)とサッカーの試合を一緒に観戦したときの金子夫妻(2002年、千葉県で。金子さん提供)

で泣くわけにいかない。家でも金子がいまさら泣けない。通勤電車の中と駅だけが、安心して泣ける場所でした。それでも大阪の病院で治療を受け、1回目の治療ではつきりともくみが取れた。治療を続けて約4か月後、最初の危機は乗り越えたので、本人も『あと20年は生きるよ』と安心していました。

△金子さんが最後にまとめた「僕の死に方」を昨年、出版。今月、自身が「金子哲雄の妻の生き方」を上梓した▽

「死んでしまふのかも想像しませんでした。父親ががんで亡くなっていったので、どう進行していくかは分かる。死んでしまうのかも想像しませんでした。」

「死んでしまふのかも想像しませんでした。父親ががんで亡くなっていったので、どう進行していくかは分かる。死んでしまうのかも想像しませんでした。」

「死んでしまふのかも想像しませんでした。父親ががんで亡くなっていったので、どう進行していくかは分かる。死んでしまうのかも想像しませんでした。」

「死んでしまふのかも想像しませんでした。父親ががんで亡くなっていったので、どう進行していくかは分かる。死んでしまうのかも想像しませんでした。」

「死んでしまふのかも想像しませんでした。父親ががんで亡くなっていったので、どう進行していくかは分かる。死んでしまうのかも想像しませんでした。」

「死んでしまふのかも想像しませんでした。父親ががんで亡くなっていったので、どう進行していくかは分かる。死んでしまうのかも想像しませんでした。」

文・竹村登茂子 写真・本間光太郎